

# マルチ人間 大槻文彦 ーその仙台の文化への貢献ー

---

東北大学大学院文学研究科 後藤 斉

学都仙台コンソーシアムサテライトキャンパス公開講座  
講座仙台学2019 「仙台の過去・現在・未来」

2019-01-19

東北工業大学 一番町ロビー 2階ホール

# 概要

---

大槻文彦は明治期に日本**最初の近代的国語辞典『言海』を編纂した国語学者**として知られています。しかし、大槻は英学修業からスタートしたのであり、その知的関心は、**国語辞典と日本語文法の編纂を中心としながらも、歴史、地理地誌、国境意識、洋学史・日欧交渉史、父祖の業績、仙台（伊達藩）、出版印刷、かな文字論、言文一致、音楽など、多岐にわたっていたのであり、マルチ人間だったのです。**

本講座では、洋学を一つの手掛かりにしつつ、**仙台学の視点から大槻による仙台の文化への貢献（意外なほど多い！）に迫ってみよう**と思います。

# 1. はじめに

---

## □ 小学館『日本大百科全書』から 大槻文彦

(1847－1928) 国語学者。儒者大槻磐溪(ばんけい)の三男として江戸に生まれる。如電(じょでん)の弟。開成所、仙台藩養賢堂、三叉(さんしゃ)学舎などに学んだ。1872年(明治5)文部省八等出仕、英和辞書の編集にあたり、その後宮城師範学校校長、文部省御用掛などを歴任し、そのほか国語調査委員会委員などをも務めた。91年刊行完成の『言海』は、ウェブスターやヘボンの辞書を参照し、各語の発音、語の類別や語源、語釈、出典にわたって記したもので、国語の普通辞書として広く用いられた(のちに増補されて『大言海』になる)。また、その巻頭に付した「語法指南」に改訂を加えて97年『広日本文典』『広日本[文典]別記』を刊行したが、これは和洋の折衷文典として、文法学の基礎をなし、学校文法にも広く影響を与えた。このほか、国語調査委員会の『口語法』『口語法別記』の編集にもかかわるなど、口語研究にも新しい面を開いた。 [古田東朔]

# 1. はじめに

## 大槻文彦肖像写真 1926

1866



(大正十五年)



(慶應三年)

大槻文彦博士肖像

# 1. はじめに

---



「大槻三賢人」像 (JR一ノ関駅前)

「大槻文彦先生像」  
もとになった木彫像は、1924年  
吉野作造ら教え子からの喜寿の祝い。  
のち大槻家から仙台一高に寄贈され、  
1969年にブロンズ像が作られた。

## 2. 大槻文彦と『言海』

---

- サンキュータツオ 『学校では教えてくれない！ 国語辞典の遊び方』 角川文庫, 2016.

最初の近代国語辞典でありながら、その後の辞書のスタンダードな形を決定づけた。

いろいろなひどい目にあいながら、ようやく刊行した…… 涙なくしては語れない苦労があったのですね！

これから新しい国をつくっていくんだ、俺たちの手で！ そんな熱量が『言海』からはにじみ出ています。

ぜひ高田宏さんの『言葉の海へ』という本をよんでください。大槻文彦が大河ドラマの主人公にふさわしいほど魅力にあふれた人物であることをおわかりいただける…

幕末から昭和にかけて生き抜いた知の巨人！

## 2. 大槻文彦と『言海』

---

### 『言海』(1889-91)

はじめ4分冊。全1240ページ(本文1100ページ)、見出し語39103語。以後、さまざまな判型で増刷、補訂をともなう改版。昭和前期までの辞書の大ベストセラー、ロングセラー。1949年に第1000版。

#### 現在

- ・ちくま学芸文庫, 2004 (本体2,200円+税)
- ・検索サイト

<http://www.joao-roiz.jp/JPDICT/2>

- ・国立国会図書館デジタルコレクション

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992954> (初版)

- ・Googleブックス

Googleで「言海」を検索し、「もっと見る」→「書籍」。1898年版を選択して「読む」。画面上で閲覧、あるいはpdfをダウンロード。



# 3. 『言海』の工夫

キヤマン (名) 彼奴ノ約。「人ノ命ヲ  
 ニ物ノ侘<sup>ロロ</sup>シサ知ラセムト思フナリ  
 言ハハト (名) 脚絆 脚生 脛<sup>ハキ</sup>  
 キヤム (名) 脚布 婦人ノまじし  
 キヤマン (名) であまんノ條ヲ見  
 金剛石ニ同ジ。又、キヤマンテ。二  
 剛石、能ク硝子ヲ切ルリシテ  
 キヤマン<sup>コシカワセキ</sup> (名) 金剛石ニ同ジ  
 キヤマンテ (名) であまんノ訛。  
 キヤム (名) 氣痛 思ヒ煩ルリ  
 キヤンチン (名) 香椿ノ訛。  
 キヤンマ (名) 黃蜻蛉 とんは  
 小マシテ、紅黄ナリ、初秋ニ多ク  
 キヤラ (名) 伽羅 梵語、黒ク



# 3. 『言海』の工夫

「柴ノ屋ノはひリノ庭ニ置ク蚊火ノ烟ウルサキ、夏ノ夕暮」妹ガ家ノ、一ニ立テル、青柳三

はひるイルヘイ（自動）（規二）這入ルノ約。入ル。

はふ（名）**掃風**〔或ハ破風〕屋ノ切棟ノ端、兩下シテ山形ヲ支ス處。圓ノ下ヘ反リテ、鋏形ヲ倒シタル

カケテ作ルヲ、唐カク一トイヒ、大棟ノ肩ニ、小棟ヲ寄セ

ル破風ヲ起スヲ、障泥アブリ一トイフト。

はふ（名）**覇府** 武家將軍ノ政府。幕府。

はふ（名）**法**〔此字、漢音、はふ、吳音、ほふナリ、兼語ノ此字ヲ冠スルヲ、其慣呼ノ音ニ因テ兩部ニ分チ收ム、はふニ無キ語ハ、ほふヲ見ルベシ〕ノリ、サダメ、オキテ、法度、法律、テダテ、**法ノ條ヲ見**三

はふフラハハヒハヒハヒ（自動）（規二）這（一）手ト足トニテ

歩ム。地ニ伏シテ行ク。ハラバフ。（人ニ）匍匐（二）行ク。

歩ム。獸蟲三**蚊行**（三）延ビ行ク。ハビコリワタル。蔓

草三**延蔓**

はふフラハハヒハヒハヒ（他動）（規二）延 這ハス。延ヘ引ク。張リワタス。引板ヒキハヘテ綱、曳キハヘテ絲、打チハヘテ葉守ノ神ノ、標繩シメハハルマデ

はふ（名）雲母ノ一種、黒クシテ青シタルヲ。

ハフ（名）**波布**〔琉球語、蝮ノ轉カ、蛇ノ轉カ〕蝮

ノ類、琉球諸島ニ産ス、頭、飯ヒノ如シ、毒極メテ甚

シ。飯匙倩

はふフハヒハヒハヒ（名）**法學** 法律ノ學。

はふフハヒハヒハヒ（自動）（規二）省〔被レ省ノ轉〕

# 3. 『言海』の工夫

ちぶくら (名) 乳脹 三味線ノ、棹ノ上、絲倉ノ下、左右へ圓ク脹レタル處ノ名。訛シテ、チブコ。

ちぶさ (名) 乳房 人ノ胸ノ左右三凸ク出デタルモノ、小キ頭アリ、乳首トイフ、男ナルハ低小ニシテ更ニ用ナシ、女子ナルハ大ク出ツ、兒ヲ生メバ乳首ヨリ乳汁ヲ出ス、兒ヲ哺育スルニ大切ナルモノナリ。獸ナルハ、胸腹ニアリテ、其數許多アルモアリ。

ちぶちぶち (名) 治部省 ヲサムルツカサ。古ヘノ八省ノ一、吉凶ノ禮儀、雅樂、僧尼、及ビ、蕃人、陵墓ノ事ヲ掌ル。

ちぶツ (名) 持佛 常ニ身ニ持チ添ヘテ祈念スル佛體。ちぶツだら (名) 持佛堂 持佛、又ハ父祖ノ位牌ナド安置シテ置ク室ノ名。祠堂

チフテリア (名) 賈布的里亞 [Diphtheria.] 馬脾風ノ條ヲ見。トイ思フ

ちぶりのかみ (名) 道觸神 旅路ニ、海、陸、共ニ、其路ニ行キ觸ルル所ノ神ヲ、手向ケスルニツキテイフ稱ナラト云。「行ク今日モ、歸ラム時モ、玉鐙ノ、一ヲ、祈レトイ思フ」

ちぶるひ (名) 血振 婦人ノ産後ノ病。血暈

ちへ (名) 千重 アマタ重ナリタル一。白雲ノ、智弊ニ隔テル、筑紫ノ國ハ

ちへい (名) 治平 世ノ治リテタラカナル一。太平。

ちへい (名) 地平 大地ノ平面。

ちへ (名) 路上ノ竊盜、すりニ同シ。(大坂)

ちぼち (名) 智謀 善ク慮リ得タル謀。



さきよく (名) 坐食 歩む。

さしよる (名) 差遣 (自動) 規二 差遣 遣ミ寄ル。チカスル。

さしれら (名) 差料 刀剣ノ、自ラ佩ルニ供フルテ。

さしわたし (名) 差渡 此ヨリ彼ヘノ直ナル距離ヲタ

リ。徑直徑

さしあ (名) 差置 書物ノ中ノ處處ニ差シ加フル書。

挿置

さし (名) 榎首 柱ノ上ニ又アリテ横木ヲ架クベキモノ。

さす (名) 差 (他動) 規二 差 (二) 指ニテ其方ヲ

示ス。指點 (二) 夫レト定ム。「日ヲ」名ヲ

「指定」(三) ヨロサス。「西ヲサシテ行ク」向 (四)

使ニ遣ル。「純友ガサツキ時、追討使ニ差されテ敵

使ニハ、少將高野ノオホキトイフ人ヲさシテ、差遣

(五) ササクガサス。「傘ヲ」關 (六) 將棋ヲ行フ。

關棋 (七) カタクカクカツク。「籠籠ヲ」輿ヲ

昇 (八) 突キ張リテ空へ上ク。サシアク。ササク。「石ヲ

中天ニ」撃 (九) 尺ニテ測ル。度 (十) 匣、机、杓

ヲ作ル。「尺ニテ差シテ作ル意」(十一) 差シ當テテ押

スツバル。「棹ヲ」揮 (十二) 點火ス。紙燭さしテ

巻シ家刀自ニ松ささセテ「簪さし」點火 (十三)

加フ。雑ス。「紅ヲ」朱ヲ「點 (十四) ツツゾ。加へ

入ルル。「水ヲ」油ヲ「目薬ヲ」智慧ヲ

注 (十五) 向クル。勘ムル。「盃ヲ」獻 (十六) 突キチ

粘シテ捕ル。「額竿ニテ鳥ヲ」(十七) 他ノ動詞ノ上

ニ、熟語トシテ、意味ナク用キル。「差シ遣ハス、差シ入ル」差シ加フ。差シ出ス。差シ迫ル。差シ急グ。差シ向ス。

さす (名) 差 (他動) 規二 刺 (指シ當ル意) (二)

當テテ突キコユ。針、槍、杓、刺 (三) 整ニテ毒ヲ行

フ。「蜂カ」螫 (三) 針ニテ縫ヒツル。「繡ヲ」網

ヲ (四) 疊ヲ作ル。針ニテ刺シ作ル意 (五) 閉ツド

ザス。鎖、棧ヲ刺シ入ルル意。「門ヲ」戸ヲ

鎖 (六) 貫ク。「鎖ヲ縊ニテ」貫 (七) 佩フベキサ

ハ。帯ノ間ニ刺シ入ルル意。「刀ヲ」佩 (八) ハサム。

サシハサム。「花ヲ」櫛ヲ「簪ヲ」挿 (九) 地ニ

突キ入レテ根ヲ生セシム。「樹ヲ」

さす (名) 差 (自動) 規二 差 (二) 汝、上ク。潮ノ

條ヲ見キ。長 (三) 生ラ。生ズ。「枝」若葉。「根

」赤ミカ「生 (三) 光、映リ入ル。「月ノ影、水ニ

」日ノ光、窓ニ「明カ」映 (四) 浸ミ入ル。「水

カ」浸入

さす (名) 差 (他動) 規二 殘 仕遂ケズシテ止ムル

シユス。熟語ヲミ用キル語ニテ助動詞ノ如シ。「爲

」見「讀ミ」「言ヒ」「聞キ」「散リ」

さす (名) 差 (自動) 規二 他ヲ使役シテ動作

ヲ起サシムル意ノ助動詞「受ケ」懲リ「着」

ノ如シ。篇首ノ語法指南ノ助動詞ノ條ヲ見キ

さす (名) 座主 比叡山延暦寺ノ長。

さす (名) 差 (自動) 不規ニ 坐 (二) スワルキ

ルヲル。(二) 罪ニ當テラル。

3. 『

## 4. 大槻文彦の家系

---

祖父 大槻玄沢(磐水) (1757-1827)

蘭学者。一関藩医から仙台藩医になり江戸に居住。杉田玄白、前野良沢に学び、芝蘭堂で多くの門人を育成。1794年から新元会(おらんだ正月)を催す。著訳書多数。『蘭学階梯』(1788. 蘭学入門書)、『重訂解体新書』(1798成、1826刊)、『環海異聞』(1807成. ロシア帰還漂流民からの聴取記録)、『厚生新編』(1811-. ショメル『日用百科事典』オランダ語訳本から蕃書和解御用で共訳)、『金城秘韞』(1812稿. 慶長遣欧使節とその将来品の調査記録)。

## 4. 大槻文彦の家系

---

父 大槻磐溪(磐翁) (1801-1878)

儒学者、文章家。養賢堂学頭。蘭学を志したこともあり、西洋砲術を修得。『献芹微衷』(1849)などで早くから親露開国論を唱える。藩命でペリーの黒船を視察して報告の絵巻『金海奇観』(1854)を作成、建議書を幕府に提出。藩主の命で『彼理日本紀行』(1862)の翻訳を指導。戊辰戦争で仙台藩のブレーンとなり、会津藩追討回避などのため文書を起草。仙台藩の降伏の後に入牢となるが、のち釈放。『孟子訳解』(1851)、『近古史談』(1854成)など。『呂宋国漂流記』(1845)も。

# 5. マルチ人間大槻文彦

---

## 「自伝」

私の学問がいかにも雑駁であると思はれよう。

荒物屋の店のやうで、色々の品はあるが上等のものはない。

⇒ 辞書に一生をささげたというイメージは誇張

言語の学が中心ではあるが、多方面への関心と絡みあっている。

綿密な考証: 歴史、地理地誌、洋学(日欧交渉史)、仙台(伊達藩)...

広い範囲での活動: 翻訳、教育、出版印刷、音楽...

社会的発言もするが、態度はおおむね穏健(?): 国境意識、かな文字論、  
言文一致、漢字制限など



## 6. 仙台の文化への貢献

---

「仙台」は生涯、文彦のナショナリズムの根であった。

高田宏『言葉の海へ』終章

ただし、具体的な記述は少なく、あまり印象に残らない。

『言葉の海へ』は名著であるが、別の視点から大槻の人生を見ることも可能。**仙台学的に大槻**を見てみよう。

## 6. 仙台の文化への貢献

---

しばしば旧藩士の友人らと協力しつつ:

- 教育（師範学校、中学校、書籍館、仙台造士義会）
- 伊達藩関係（戊辰戦争、伊達騒動、慶長遣欧使節、遠祖その他）
- 自分の父祖、遠祖
- 仙台関係の偉人、功労者
  - 著述、資料編纂、講演、考証、遺跡調査
  - 建碑、撰文、贈位運動
  - 他者の著作の校閲・序文執筆など
  - 文化事業への協力

## 6. 仙台の文化への貢献

---



青葉区子平町 龍雲院 前哲林子平碑

## 6. 仙台の文化への貢献

---



青葉区霊屋下 瑞鳳殿わき 弔魂碑



## 6. 仙台の文化



宮城野区榴ヶ岡 榴岡天満宮 星君恂太郎碑

## 6. 仙台の文化への貢献

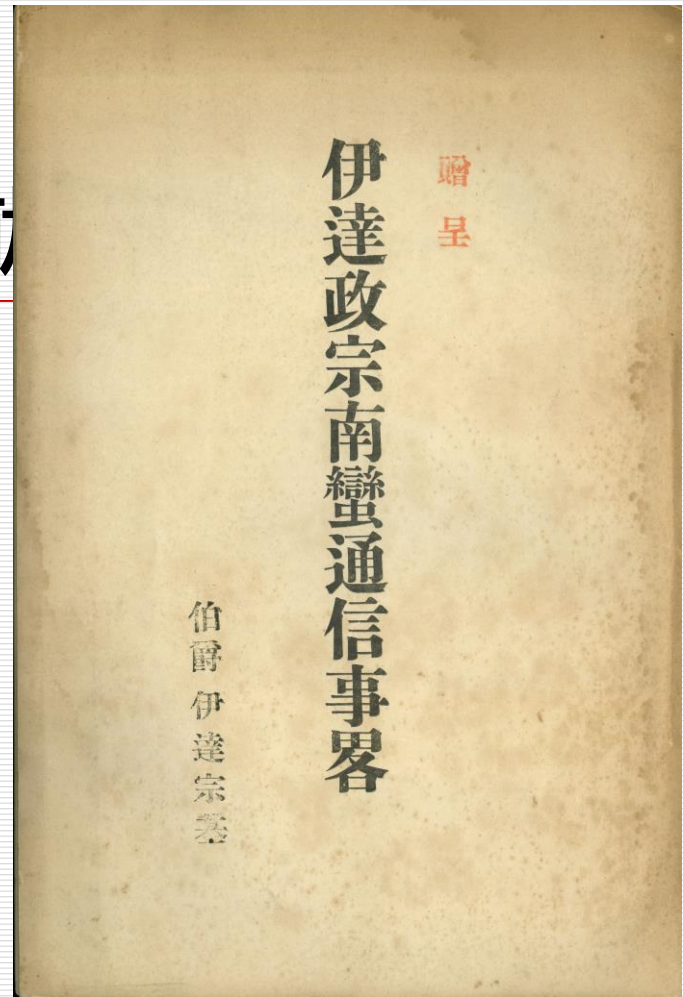
---



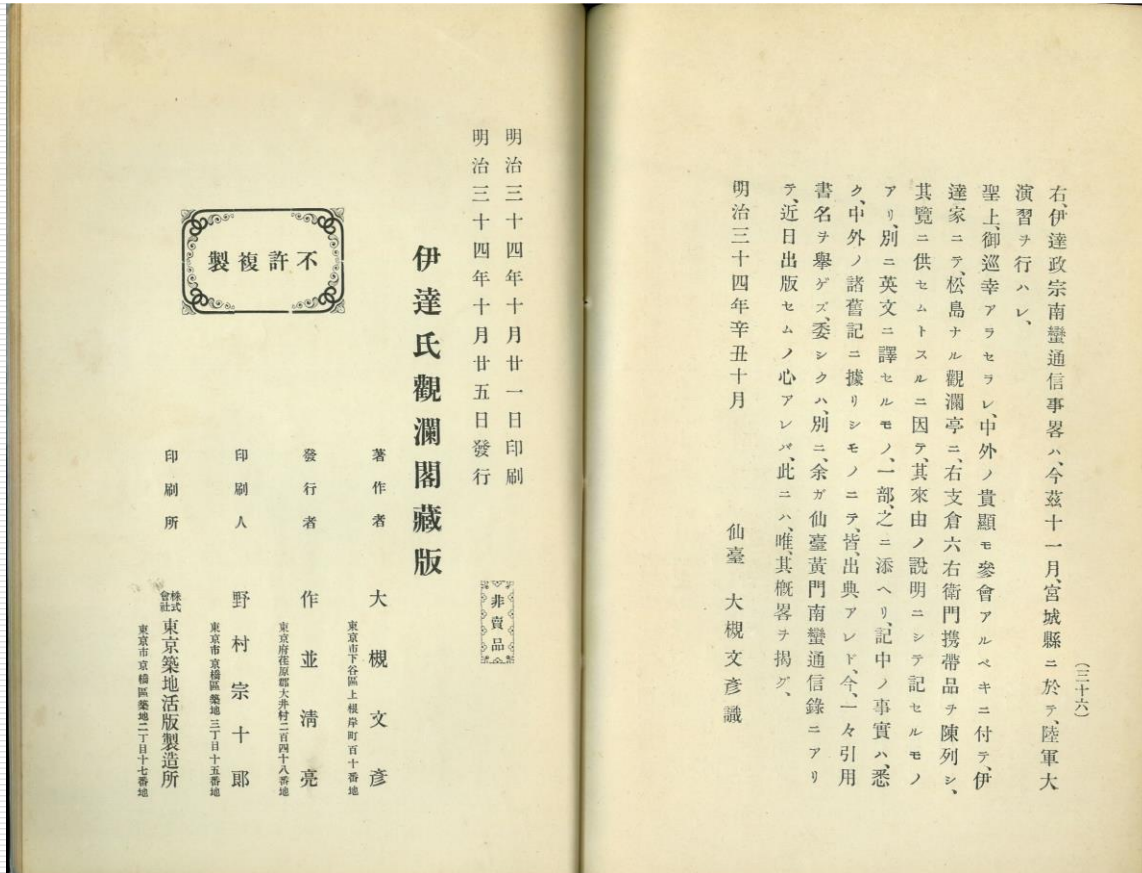
青葉区青葉町 光明寺 支倉六右衛門紀功碑



# 6. 仙台の文化への貢献



伊達政宗南蛮通信事略  
(1901)



## 6. 仙台の文化への

A  
BRIEF ACCOUNT  
OF  
THE COMMUNICATION OF DATE MASAMUNE  
WITH  
THE SOUTHERN BARBARIANS.

I.

MASAMUNE INTENDS TO CONQUER THE SOUTHERN  
BARBARIANS—ENTERTAINS FRIENDSHIP  
WITH PADRE SOTELO.

In the last years of Keichō, Date Masamune, Kōmon of Sendai, started the intention to conquer the Southern Barbarians. In a collection of his works, we read the subjoined piece :—

False religion propagates itself,  
Leading our dear country astray.  
Bent upon conquering the Southern Barbarians,  
And still unable to reap success ;  
When can mighty rukhs' Wing  
Sweep over the Great South ?  
Long, long awaits he the hour to come,  
Riding on storm thousands and thousands of miles.

(Composed on occasion as I intended to  
conquer the Southern Barbarians.)

伊達政宗南蛮通信事略 英訳

## 6. 仙台の文化への貢献

---



太白区門前町 大年寺 撫松小倉翁遺徳碑



# 6. 仙台の文化へ

磐溪追遠展覧会  
大槻文庫書目 (1908)

